## Rāṣṭrapālaparipṛcchā の成立について

## 村 上 真 完

一 ヴィンテルニッツはインド文學史第二卷(英語版三三 大寶積經卷80―8、護國菩薩會第一十八 (大11)、闍那崛多ない』(J. Ensink, The Question of Rāṣṭrapāla, p. IX)と註記ない。この經が漢譯よりもあまり古くないという證據とによっない』(J. Ensink, The Question of Rāṣṭrapāla, p. IX)と註記ない。この經が漢譯よりもあまり古くないという證據とはならない』(J. Ensink, The Question of Rāṣṭrapāla, p. IX)と註記ない。こでまず漢譯の檢討からはじめる。さきに觸れた漢譯本さが、PR成立の基準とされた漢譯についての考察を缺く。ここでまず漢譯の檢討からはじめる。さきに觸れた漢譯本さが、PR成立の基準とされた漢譯についての考察を缺く。ここでまず漢譯の檢討からはじめる。さきに觸れた漢譯本さが、PR成立の基準とされた漢譯についての考察を缺く。

この經が出ていない。○四中)に由來するようであるが、五九七年成立の三寶紀に五○上)。ヴィンテルニッツが記す年代は歷代三寶紀(大49一五)、同二十(六○○)年になくなつている(開元錄大55五

ma, Ye-śes sda の譯といい、デンカルマ目錄に戴せられて大乘經四卷(大12)があり、九八〇年以後の譯出である。大乘經四卷(大12)があり、九八〇年以後の譯出である。

<del>--- 640</del>

徳光太子經一卷 經\*大始六年九月三十8出(\*三本では泰始) 藏記集卷二(大55七下)の竺|法護の譯出經典の中に藏記集卷二(大55七下)の竺|法護の譯出經典の中に、出三ているが、詳しくは檢討されていない。これについて、出三

おり、九世紀初の譯と考えられる。

り泰始六年とすると二七〇ADの譯出である。 といい、開元錄卷二(四九四下)にも同文を引く。三本によ

というのがこれであり、崛多は開皇五(五八五)年に 譯 經 に降開皇年崛多等於大興善寺譯(\*等の字は三本にない)

譯である。大唐内典錄卷六(大55二八八下)に

Rāṣṭrapālaparipṛcchā の成立について(村

比して短く、半分にも繭たない。 徳光太子經はR原文及び前記の二つの漢譯、チベット譯に

比して短く、半分にも滿たない。

- ② \* 護 ・國 (賴吒和羅)尊者による讚佛偈(pp. 57-720)
- ③ 四種の法を擧げた後にとれを繰返し敷衍する偈(pp. 10<sup>10</sup>-1<sup>-10</sup>, 16<sup>-21</sup>, 12<sup>4-15</sup>, 13<sup>4-15</sup>, 14<sup>3-12</sup>, 15<sup>1-8</sup>, 17<sup>8-11</sup>, 18<sup>7-16</sup>, 19<sup>4-15</sup>, 20
- ④ 佛の前生話(五十の前生話)(pp. 219-2718)
- ⑤ 悪比丘に關する豫言といましめ(pp. 281-336)
- ⑥ (以下第二章)淨居天が 福 「焰 王子(德光太子)に不放逸を
- (固有名詞は崛多譯で示し、括弧內に竺法護譯を示す)。 ③ 焰 意(頞眞無) 王が成利慧佛を讚ずる偈(pp. 5413-562) 「福紹王子が成 利 慧 (吉義) 佛を讚ずる偈(pp. 509-5318)

 $\langle$ る。形式について見ると德光太子經に缺く部分は第一章に多 關するもの(①、 て先行する散文の中に記す内容を繰返し敷衍するものであ に關する偈 (③、 の 八項であり、 かつ偈に多い。 内容について見ると菩薩や佛の德及び形容に ④)、讚佛偈(①、②、⑦、⑧)、宗敎的 卽ちヴァィド ⑥)と見ることが出來る。 ヤがRの偈を三五三偈と數 上記③はすべ 實踐

さてこれらの徳光太子經に缺ける部分は、恐らくは竺法える(歸敬頌を除く)中、二四八偈が徳光太子經に缺く。

が譯した原典にもなく、

その後に增廣されたものであろう。

護

見ることができる。これに缺く部分は主に讚佛や佛陀觀に關の前生としての徳、光太子の物語も不放逸を中心とするとして菩提を求めて修行するという宗教的實踐を主題とし、佛略をした形跡はみとめ難い。つまり德光太子經は、不放逸に略をした形跡はみとめ難い。つまり徳光太子經は、不放逸に

第二に、徳光太子經に缺く偈の中、R第一章末の偈(佛のするものである。

五十の前生話)の中に、

た』(p. 2317-18) のように美しい四『億』の女を捨てて、出家して勝者の教えに入つのように美しい四『億』の女を捨てて、出家して勝者の教えに入つ『『(私が) プンヤラシュミ(福焰、徳光)であつたときに、天女 (

形を傳えていると考えられる。立したと考えられ、その偈を含まない德光太子經がRの原始との偈(従って恐らくは第一章末の偈)は第二章におくれて成というが、これはRP第二章の物語を指すものと考えられる。

iti. puṇyaraśmeḥ satpuruṣasya pūrvayogasūtraratnarūjaṃ sa,次に德光太子經という經名はPP第二章を主とする名稱であ

māptam/

想羅所問德光太子經という)。後の名稱はこの經の對告衆「護り、德光太子經に相當するといえよう(但し三本によれば賴吒草に關するものと考えられるが、章名とせず、經名としておという。はじめの名稱は(サンスクリット本特有であるが)第二という。はじめの名稱は(サンスクリット本特有であるが)第二

國尊者に因むもので、チベット譯の 表題 と同一であり、

の二漢譯も護國の名を冠している。

一 方 RP

末に

はこの法

門他

dharmaparyāya を、amoghapratijñāviśuddhi(離癡願行清浴、不空誓清淨行、廣大淸淨不空誓願)、satpuruṣavikriḍita bo內は漢譯を古い順に示す)。この中、特に第二の名(施護譯參照)、內は漢譯を古い順に示す)。この中、特に第二の名(施護譯參照)、方見ると、この名稱はR第二章に關するものと考えられから見ると、この名稱はR第二章に關するものと考えられから見ると、この名稱はR第二章に關するものと考えられから見ると、この名稱はR第二章に關するものと考えられから見ると、この名稱はR第二章に關するものと考えられから見ると、この名稱はR第二章に關するものと考えられから見ると、この名稱はR第二章に關するものと考えられる。

(徳光太子物語)のいずれが古いかは決定しがたい。 を、徳光太子經はP第一章 Nidānaparivarta の内容をわずる。徳光太子經はP第一章の内容の大部分を含む。このことかしか含まないが、第二章の内容の大部分を含む。このことかに含まれるP第一章の内容(護國の問いと、佛による答太子經に含まれるP第一章の内容(護國の問いと、佛による答太子經に含まれるP第一章の内容(護國の問いと、佛による答太子經に含まれるP第一章が展覧である。

リ中 成立に關するその他の問題 Rațțhapālasutta や中 呵 含 132 護っ 國 賴 吒 一秒羅 の名は、 經 等 いて パ 4 見 1

Rāṣṭrapālaparipṛcchā

の

成立について

上

Rがその名を引き繼いだことは考えられよう。して漸く許されたという。これはRとは全く關係がないが、え、彼は父母に出家の許しを乞うて許されず、ついに死を賭

點 は RP 影印北京版第八三三(33卷)があり、Rの譯者、Jinamitra と の經が菩薩、菩提行には觸れない點はRと異なる。) 感ぜられる。また出家中心主義も兩方共通である。 るもので、 に佛が答えて、比丘のあり方を說き、僞善なる比丘 國尊者が「如來のこの教えを滅ぼす衆生は誰 Ye-śes sde 卽ち九世紀初に譯された小經である。 チベット 第一章末の偈(徳光太子經に缺く)とも共通的 RPとは全く別な經ではあるが、 譯にはRと全く同名の經 典、 東北目 悪い比 か」とい 錄 丘にふ 第 なも (しかしこ に言及す う問 六六、 の れる は が

関<sub>ーブヤ</sub> され 眞無)王は無量壽佛、福 焰(德光)王子は釋尊、 壽經等とは異なる獨特な説である。 R第二章末に前生話に登場する人物について、 ていると考えられるが、 (無怒覺) 佛であつたと結ぶ。 ここに阿彌陀 阿彌陀佛の前生話としては (信仰 城 が は 反 阿アクシ 映 **--** 642

ずつあげるのは、 等にも例があり、 RP 第 致がみられ 章に、 菩薩のあり方として善法または不善法 る。 Kāśyapaparivarta(大寶積經卷11 同 文は見られないにしても、 若干の 普明 を四 術 種

徳光太子經に缺く部分の中、佛陀觀に關しては

上

とを悟入し』(p. 416-17) と悟入し、 『諸佛如來の身は堅固 dhruva 吉祥 如來身は一切佛國土に遍行し一切衆生の眼前にあるこ śiva 常住 śāśvata である

他 方 RP という。 には法身、 佛身常住については涅槃經との關連性も考えるが、 佛性の語は見られない。

gasūtra- の語が用い 物語についてジャータカの語を用い ない(經末には pūrvayo うようにジャータカ (本生) もない』(p. 5516)という點はさきの佛身常住の説に通ずる。 ろう」ということばを會衆の中において(あなたは) しかし『つねに常見の想ある世間を見ては「(私は) 涅槃に入 られる (p. 55)。 生 (p. 5511)、『あなたには來ることあるいはいずこに行くこと RP第一章末の偈に引かれる釋尊の前生話は、 過去の成利慧佛の讚歎 出家、 釋尊傳が過去佛にも適用され 降魔、 られている)。この點は月燈三昧經や法華 轉法輪、涅槃という佛傳の略説が語 の偈 ではあるが、Pには、 に は、 住兜率、 たので 白 フィノーも言 象 佛 入 いう ある。 の 胎 前 出 生

ある。

王 和檀王に比定することができる。 人に自分の血を與える)については支讖譯雜譬喩經 示している (pp. VII-VIII)。 殘餘のうち、 については 五十の本生の中、十六を除いては、 Lalita Vistara p. 170<sup>16, 15</sup>, ⊙Kesarirāja フィ 方廣大莊厳經卷五 ②Sarvadarśin (病 シー がその出典を ⊠ Viśrutaśri (국) の薩

經等と同様である。

八中、 げ)についてはパーリのジャータカに同名ものの 一三八、三二五)がありながら、 (大三、 師子、 五六六下、鷄薩梨、 大聞德) に名だけが見える。 尸利)、 物語を異にする。 佛本 行集經卷14 また。3godha(とか (大三、

致するも

の

rāja XXXIV) などは、 意王女(病人に自分の血肉を施す。cf. 月燈三昧經卷八、 り身を投ず。 四等北傳の系統に屬する。 タカ49 Sivi-j. (眼を施す)とは異なり、賢愚經一や智度 もあるが、(8) これらの本生の中にはパーリ・ジャータカに一 (鳩を救うために身肉を施す、尸毘王) 涅槃經卷14)、 大乘經典にはじめて見られ また(3) (20)福 焰 (cf. P第二章)、 (善きことばのために斷崖よ は、 る物語で Samādhi ジャ (29) 智兰

IJ なかつたと考えられる。 同文である。 相違はない。Rは Śikṣāsamuccaya にも引かれるが、 はあるが、 ット本特有であり、 崛多譯と施護譯とでは後者が一頁ほど分量が少なく、 2 1 要3、昭和43)にテキスト及び文獻について [Rāṣṭrapālaparipṛcchā 共にサンスクリット文及びチベット譯とも大きな したがつて崛多譯以後にはRPは殆ど變化をうけ チベット譯以後の付加と考えられ 但し經初の偈 の語 彙 (八戶工業高等專門學校紀 (歸敬頌) ጴ れ はサンスク ほ 異 ぼ

- 伊藤信海氏、 大正大學々報28輯、 昭 13
- 3 pūrvayoga について」(宗教研究42・3、 昭 和  $\dot{4}4$ 年3月)